

# 半世紀先を見すえた 大学改革

—開学50年の節目に取り組むキャンパス再編—

## INTERVIEW

獨協大学  
外国語学部ドイツ語学科 教授  
教務部長

山路 朝彦 氏



## 新しい教学と文科系の視点で 未来の地域・環境ステーションへ

この10年間、キャンパス再編の課題は  
環境負荷の低減や地域との共生に

創立50周年は、本学の出発点である理念、歴史、そして将来のビジョンを、教職員と学生が再確認して共有するための節目だと考えています。本学の理念は、学則第1条にあるように、学問を通して人間形成を行うこと、伝統である外国語教育を重視し、それらを通して実践的で独立した人格を養うことです。たとえ100年経とうが、私立大学にとって建学の理念をいかに体現し高めていくかという使命は変わりません。そういった目的を達成するために、教学があり組織や施設があるのだと思います。

2004年の40周年から2014年の50周年に向けた10年間のキャンパス再編の流れは、概ね3つのステップに分けられます。大きな新築施設としては、2004年から2007年までの第1ステップで図書館と教室棟などからなる複合施設である天野貞祐記念館が、2007年から2010年までの第2ステップで学生寮と東棟が建設され、2014年までの第3ステップでは学生センターと西棟が建設される予定です。

キャンパスの施設計画は、教育・研究の質の向上に資することが最重要ですが、この10年の間に老朽化への対策、環境負荷の軽減や地域との共生も大事な課題になってきました。そして建物を新築するだけでなく、耐震工事、改修、移設、解体などの作業も計画的に行って来ました。またキャンパス全体の再編には、グラウンドの全面人工芝化や隣接する川の水辺再生などのランドスケープも視野に入っています。

- 1 2階キャレルブース／造作家具一式(間伐材使用)  
吹き抜けを望むキャレルブースは、自習などのパーソナル空間やコミュニケーションスポットとして多目的な利用が可能。埼玉県産のヒノキ間伐材による造作家具は、ブース毎に構成内容を変えている。  
設計:清水建設(株)一級建築士事務所
- 2 4 1階ロビー／スツール:ステップ
- 3 廊下／造作ベンチ(間伐材使用)







グラウンドの向こうに松原団地を望む。

## 独自の学び「全学共通カリキュラム」と 呼応する学部組織の再編が教学の柱

かつて、本学の学部構成は、教養部の上に専門学部がありました。しかし2年間の教養教育と後の2年間の専門教育がうまく接続せず、学生の十分な満足が得られませんでした。1991年に施行された設置基準の大綱化以降、教養教育や専門教育のあり方を、各大学が独自に考えてもよいことになりました。本学は教養教育を重視してきましたから、1994年に旧教養部を一旦改組して、新たな教養教育のあり方を考えることにしたのです。教養部と専門学部を上下ではなく並行に置いて、専門を学びながらそこに必要な教養を得るというように、両者を往復しながら学べるようにしました。それが新たな教学のかたち、全学共通カリキュラムです。2003年から始まった全カリと呼ぶこの新しいカリキュラムは、本学が開講する約6200の課目のうち1300以上を占めるという独自の学びに成長しました。

教学組織の改革も同時に進めて、2007年から3年続けて新たな学部・学科を設立しました。2007年に設置した国際教養学部は、旧教養部を国際的な教養学部として再編したもので、本学の教養教育の中核を成し、全カリにも多くの講座を開放しています。さらに法学部に総合政策学科を、外国語学部交流文化学科を設置しました。現在は4学部10学科と4つの研究所を持つ文科系総合大学になりました。

そういった教学体制の改革と並行して、建物の改修や新設も進めてきました。2010年に新設された東棟の施設の中には、同時通訳演習室や環境生物実習室などがありますが、これらも外国語教育研究所や環境共生研究所などの教学の経験から必要とされたのです。



2層吹き抜けの空間は室内コンサートなども可能。グローバルな大学を象徴する大地球儀が設置された。

## 新しい教学が理想のかたちに結実した 東棟の学びとくつろぎの場

東棟の場所は、開学時に最初の授業が行われた第2棟の跡地で、獨協大学における教学の出発点であり聖地とも言えます。東棟はキャンパスの核として、教学のための最新施設が集約されています。ドイツの国会議事堂の外観をイメージし、石の素材感をインテリアのベースにした天野貞祐記念館に対して、東棟の外観はドイツのベルガモン美術館がイメージされています。三層構成のクラシカルな2つの棟をモダンなガ

ラス張りブリッジで繋ぐシンメトリーなデザインで、インテリアは木の素材感がベースになっています。その素材感は家具にも反映されました。また、18mスパンの大空間を確保して、将来の教学プログラムに合わせて、フレキシブルに教室割りやゾーニングを変えられるようにしました。

教室は65室用意しています。1・2階には大きな階段教室が6つあって、AVとPCが完備され、AVを駆使して導入教育やゲストスピーカーを招いての合同授業が行えます。教室間では、同じ内容を映像と音声で受けられ、双方向での質疑応答もでき、1600名が同時に受講することも可能です。3階には、同時通訳演習室や環境生物実習室などの特殊教室と小教室があり、中央には屋上庭園を設けました。4階はPC教室が並び、無線LANを整備してパソコンの持ち込みもできます。最上階の5階は全て小教室で、3・4年生のゼミや語学教育など、先生との対話を通して行う対面型少人数教育に利用されます。

また、「中の学び」である教室に対して、「外の学び」と位置づけた特徴的な共有スペースを設け、くつろぎと同時に学びの機能も持たせています。例えば1階の学生ラウンジは、履修登録の時期には150台のPCが入りますが、それ以外には自由なコミュニケーションの場となります。2階のキャレルブースは、学生たちのくつろぎと学びの場としていつも満員で、家具には間伐材が使われています。

## エコキャンパス推進の中核は 東棟の次世代型省エネ設備

キャンパスの環境負荷軽減については、2007年から「省CO2エコキャンパス・プロジェクト」をスタートしており、これは国土交通省の平成21年度「住宅・建築物省CO2推進モデル事業」に、大学組織としては唯一採択されました。ハード面では、省CO2型として新設した東棟をはじめ、既存棟へも省エネ設備を導入し、全学規模で実施しています。ソフト面では、「見える化」によって省エネ活動や環境教育を全学に浸透させ、見学やシンポジウムなどの「見せる化」によって地域へ発信しています。

東棟については、まず、自然光や自然換気など自然エネルギーを有効利用しています。また、マイクログリッドのエネルギー需要制御を使って電力使用状況をモニタリングし、空調機器をコントロールしています。1階の表示モニターのほか各教室でも「見える化」し、制御盤にグリーンランプが付くと自然換気に切り替え可能になります。野菜の栽培などが行える屋上庭園は、未来型農業や里山の管理・運営の体験学習に使われています。



屋上庭園



1

- 1 2階ラウンジ/イス:デライト、テーブル:DT-P4  
2階から4階までガラス張りのブリッジに位置し、グラウンドからの光が内部へ抜ける通り道に、光が踊るような空間として、透過性が高く、軽やかで明るいホワイトメッシュのイスを採用。
- 2 1階ロビー/テーブル:DT-15(天板特注品)、ラウンジチェア(特注品)

- 3 展望ラウンジ/ラウンジチェア(特注品)、テーブル:DT-P5(天板特注品)  
レセプションにも使用可能な最上階の展望ラウンジは、ゆったりと時間を過ごすラウンジチェアを用い、カラーも朱色にしてアクセントを付けている。

- 4 吹き抜けを望む廊下に配置されたキャレルブース群
- 5 学生ラウンジ/テーブル:DT-15(天板特注品)、イス:デューン  
家具のレイアウトを変えPCを設置して、履修登録にも使用。天板は、直配列でもコード類が逃げられるよう切り欠きを設けた形状に。



2



3



4



5





### 環境と情報をテーマとした新学科が これからのキャンパスをつくる鍵に

キャンパス再編過程から見てきた新しい教学が、環境教育です。今はまだ、環境や情報を組み合わせたような組織とカリキュラムを持った新学科ができないだろうかという段階ですが、重要なテーマと捉えています。

4つある研究所の中で、特に環境共生研究所と地域総合研究所は、地域と共に活動するために設立されました。本学は、キャンパス内だけでなく、地域の環境ステーションとしての役割も担いたいと考えています。現在では、市と連携して環境対策を推進し、学内に設置したモニターで近隣のエネルギー消費量のデータを集約したりしています。

地域総合研究所は、企業や行政と連携して、隣接する松原団地の高齢化問題や再生にシンクタンクとして取り組んでいます。1960年にできたこの団地は、1964年開学の本学と共に歩んできました。しかし、今では住む人も住み方も変化してしまい、ポスト団地といった新しいモデルが必要になってきています。

環境問題や地域問題を、従来のような工学系ではなく、人間社会や地域の行政・政策といった文科系の視点から捉えていくことは新しい方向であり、今後は必要になってくると思います。外国語が得意な本学では、例えば福祉が進んだ海外モデルについて、現地で実際に調べてくるという学びも可能なわけです。

これからの持続可能な社会を担っていくのは、きちんとした知識や意識を持った若い世代による市民レベルでの活動です。こうした若者を社会の様々なフィールドへ送り出すには、全カリでの横断的な学びを進展させ、実社会を体験ができるシステムを用意することなども大事になってくるのではないのでしょうか。

### 教学の意図が反映された 開放的で可動性のある施設計画を

次の50年に必要となってくる施設については、教学の意図をきちんと認識して計画をすることが大事だと思います。東棟についても、どのような教育をし、必要な教室はどのような形式かを、先生や職員が十分話し合って決めてきました。

東棟における施設計画のポイントは、まず施設が開放的であること。教室の壁やドアなどがシースルーで、廊下から中が見えます。将来的には、開放した教室で行う授業も、フレキシブルなシステムに変えていきたいと考えています。次は可動性があること。収容人数175名以下の教室には、家具が移動できたり、収納して空間が変えられるなどの可動性を持たせています。

今の学生は少し見えなかったり聞こえなかったりすると、授業を放棄してしまう傾向があります。だから授業に参加しやすくするには、まず見やすい・聞こえやすいことが大事で、それによって授業の集中度も上がります。また大教室のイスの形は、学生に「いつも授業を受ける用意がある」と語りかけるような雰囲気を持っています。こういうことも、授業に参加しやすくなる環境作りのひとつなのではないかと思っています。

イスなど家具については、実際に座ってみて選びましたが、細かいところまで吟味し納得して選ぶことが大事ですね。黒板、スクリーンや教卓の位置関係など、微妙なことが見やすさや話しやすさに関係します。また座る学生側だけでなく先生側から見た家具という視点も大事です。



- ①② 大教室(180人教室×2、350人教室×3、450人教室×1) / 講義デスク・イス:SCF-5105、移動席 テーブル:CTN2(黒板特注品)、イス:SCM-5105C  
収納時に前傾しないイスは、起立して身を正す印象を与え、授業に臨む雰囲気を醸成している。また、空き席に荷物を置くことも可能。背と座のパッド色は、3人掛けの中央を黒としてアクセントを付け、北側の教室は暖色、南側の教室は涼しい色にするなど細かな雰囲気づくりをしている。
- ③ E308教室 / PC対応テーブル:SCM-5505T(特注品)、イス:ベン
- ④ 同時通訳演習室 / デスク:SCM-300、イス:ベン
- ⑤ 地理学実習室 / テーブル:CTZ、イス:ベン
- ⑥⑦ 2階教室 / デスク:SCM-300、イス:ベン  
対話型の少人数教育を重視。ガラス張り開放的なつらえの教室もある。